

日本海沿岸地帯振興促進議員連盟・日本沿岸地帯振興連盟合同勉強会

日時 平成 24 年 5 月 31 日（木） 10:00～11:00

場所 ホテルニューオータニ ザ・メイン「舞の間」

演題 これからの地域づくり

講師 坂本 光司 氏（法政大学大学院政策創造研究科 教授）

ただ今ご紹介いただきました法政大学大学院政策創造研究科の坂本と申します。

私の正面に親しい石井知事が座っておられます。昔、自治省から静岡県に出向されていたことがありまして、本当にいい県をつくるためにご尽力いただいた方です。

そのときに一緒に仕事をやった方でありまして、今日は本当に久方ぶりにお会いいたしました。

さて、「これからの地域づくり」ということで昨年発表した「47 都道府県の幸福度に関する研究成果」に関する資料がお手元に配布されていますけれども、本日は、もう少し広い観点から少し話をいたします。私は地域づくりの一つのキーワードというのは効果とか、効率とか、経済的豊かさとか、物的豊かさとか、そういうものではなくて、幸せ軸だと思っています。如何に関係者を幸せにするかというのがこれからの地域づくりの最大のテーマだと私は思います。いい会社を誘致する。大きな会社をわが県に、わが地域に誘致する。その誘致するときにも雇用拡大をしてくれるかとか、税金責任を果たしてくれるかということよりはむしろ、雇用される県民を本当に幸せにしてくれるのだろうかという点で企業の誘致をされたり育成をされたり、あるいは企業の支援をされたりした方がいいのではないかと私は思います。

毎月 5 本くらい色々なメディアに原稿を書かせていただいておりますけれども、そのうちの一つに私が住んでおります静岡県の静岡新聞というところがあります。そこに「時を評論する」というので「時評」という欄がありまして、2～3 日前にこんなことを書いておきました。「リストラは会社を滅ぼす。リストラは許されない」と。わずかの原稿ですけれども、いつもそういう論陣を張るわけです。その中にはっきりと企業の名前を挙げました。静岡新聞さんから止められるかと思いましたが、「アルファベットでも結構ですよ」と言っておきましたけれども。新聞でそのまま情報が流れておりますから、皆さん方も知っているとおりで。その時評の中でパナソニックさんについて私は痛烈に批判をいたしまし

た。NEC さんについても業績がなかなか回復しないのは当然だと思います。ソニーも同類項です。オリンパスさんだって同類項かもしれません。いい会社とはちっとも思いません。ですから、これから下手すると内部崩壊が起きるのではないかと考えております。

パナソニックさんの本社は大阪ですけれども、先日そこで講演を依頼されて、2 時間くらいお話をしてきました。そのときの主催者は労働組合でした。「なぜ労働組合が」と私は思いましたけれども、幸せ軸で労働組合運動をやろうとするならば、これもまたよしと思いましたが、忙しい合間を縫って行ってきました。玄関を入った右側に立派な労働組合のビルがありました。ユニオンだからかもしれません。書記長とか、執行委員長という労働組合の中核の方々が今日のように勢ぞろいされておりましたけれども、私はその中で「あなた方も同罪である。喜びも、悲しみも、苦しみもともに分かち合うのが同志ではないか。どうして1万人の社員を減少するならば体を張って抵抗しないのか。『私たちが給料1割を下げますから、どうか同志の命と生活を守ってください』とどうしてそういう運動を起こさないのだ。そういうことをしないから、業績が上がらないのだ」と言いました。

今の生活者は幸せ軸で企業を見ているのです。買い物をするときにも、お店を選択するときには昔は品ぞろえとか、安いとか、高いとか、ブランドショップであるか、ないかとか、そんなことで選択をしていた人が多数派ですけれども、今日はどこの会社が世のため、人のために役立っているのか。どこの会社が弱き人々に対して優しいことをしているのか。どこの会社の社会価値が高いのかということで選択しているのです。「残念ながら、そんなことをしていますと、まともな社員からも、まともな生活者からも捨てられますよ」と約2時間それだけの話を厳しくさせていただきました。なぜかという、労働組合ですから若い方が多かったのですけれども、この方々を変えたかったからです。途中から多くの人がポケットからハンカチを出して涙をぬぐっておられましたけれども、忙しい合間を縫って来てよかったと私は思いました。

今も言いましたように皆さん方の地域社会に幸せを提供するとか、幸せを創造するというのが企業の最高責任です。ある意味で地域づくりは人づくりです。その多くの人々というのは組織社会に属していますから、組織社会、あるいは企業社会で幸せを感じるような組織、企業を増やしていくということだと思います。そのためには教育が重要かもしれません。私は随分と本をたくさん書いていまして、70冊余りになります。去年は4冊くらい、今年も既に1冊、6月でまた1冊、7月でまた1冊、10月にまた1冊、今年も4冊以上になると思います。その中で一貫して書いているのは企業経営とは人を幸せにするための活

動であるということです。

これは行政経営でも、地域経営でも同じだと思います。業績を高める活動ではありません。有名になるための活動ではありません。組織を成長、発展させるための活動ではありません。1番になるための活動ではありません。ましてやライバル企業を打ち負かすようなとんでもない活動でもありません。企業経営というのは、あるいは組織経営というのはその組織にかかわりのあるすべての人々の永遠の幸せを実現するための活動です。私たちの目的は幸福を追求するためです。幸福を実現するために私たちは存在するわけです。

しかし、先ほど言いましたように業績を高める活動という点が目的となっており、多くの会社はこのことを勘違いされているのです。だから、とんでもないことをしてしまうのです。とんでもないことというのは、例えば売上がなかなか上がらないといいますと、営業マンに圧力をかけて、「今まで1日10カ所を回っていたものをこれからは15カ所回りなさい」と言います。あるいは売上がなかなか上がらない場合にはコストを下げることを考えますから、「今まで3人でやっていた仕事を2人でやりなさい。今まで1分間で10mのラインのスピードをもっと上げてやりなさい」と言います。恐らく戦後60年以上われわれは一貫して生産性向上の経営努力をしてきたわけで、現在はタオルを絞ろうと思っても、水が出ないのです。タオルそのものが乾き切っているという感じです。その中で3人の仕事を2人で、今まで10件回っていたところを15件、20件回れと言うのは恐らく多くの人々の心も体も痛めつけると思います。

本来は、3人を前提にして、その中で付加価値の高い仕事を考えるのが経営者の責任です。私は中国も、インドも、ベトナムも、インドネシアも、タイも全部見て回っておりますけれども、「価格競争力でこれからも幸せになろうなんて言う経営者は誰ですか」と私は言います。あり得ない話です。そんなことをすればまるで天に向かって唾を吐いているような経営学になります。おのれはそれでいいかもしれません。自分と自分の家族はそれで何とか生きていくことができるかもしれませんが、経営者の本当の使命というのはわが社に馳せ参じてくれた社員やその家族の命と生活を守ることです。その方々をリストラしながらというのはトカゲの尻尾ではあるまいし、私に言わせますといいかげんな会社が非常に多いと思います。これからの地域づくりのまだ前座のところですよ。

いろいろなデータを見ますと、この国では自殺する人が非常に多くなっております。13年連続3万人以上です。戦後、昭和20年とか、25年のころと比べて、豊かさは間違いなく10倍以上なのです。日本の約5000万戸の世帯は、恐らくインドに行けば、バングラデ

シュに行けば、ミャンマーに行けば、極端な言い方をしますと、その日のうちに小さなブティックが成功するというくらい物持ち社会です。日本人は食べ残した物を捨ててしまっておりますけれども、その物が新鮮な状況でしたら毎日何億人の方が命を長らえるということになっているのです。

この国の問題は、この国にいてもなかなか分かりませんが、海外からこの国を透視したり、あるいは世界的なデータを使いながらこの地域を数字ではっきり見てみますと異常世界です。多くの人々はゆでガエルになってしまっています。何が不幸で、何が幸せか。何が満たされて、何が満たされていないかの物差しがほとんど狂ってしまっているという感じがいたします。この国の問題は経済の問題ではなくて、心の問題だと思います。そしてリーダーの背中の問題だと思います。国歌なんかはその象徴かもしれません。

自らが自らの命を断つという人をゼロにしたいものです。自殺者が多いというのは先進国の宿命であるというデータ知らずのくだらない論者がおりますけれども、マクロもミクロもちっとも見ていないと私は思います。データもここにありますが、世界の主要国の自殺者比率と自殺者は国連が毎年私たちに開示してくれます。人口が10億人を越えたところと人口が70万人しかいない国家もあります。その中で単純比較できませんから、多くの統計で見るのは人口10万人あたり自殺者が何人いるかというデータが毎年出されております。

ここに最新のデータがありますが、先進国の中で日本の自殺者の多さは例外中の例外だと思います。アメリカの2倍どころではないのです。3倍どころではないのです。イギリスとも、イタリアとも、ドイツとも、フランスとも同様です。しからば日本は世界で比較するとどの辺のクラスかといいますと、賢明な皆さん方ですからお分かりでしょう。大変ある国に失礼ですけれども、ロシア並みと言っても過言ではありません。ロシアに申し訳ありませんが、ロシア並みと言っても、アルメニアとか、アゼルバイジャンとか、いまだにテント暮らしの生活をしている難民の方が多くいらっしゃる国と同じなのです。

日本は1年間に3万人以上の方々がこれだけ豊かでお腹を膨らませて死んでいっております。国連のデータを見ると、世界の多くの人々も亡くなっていますけれども、およそ1日当たり3万人は餓死で亡くなっているのです。365掛ける3万人としますと、地球上では一体何人がお腹を空かせて死んでいるのか。日本人はお腹を膨らませて死んでいますけれども、多くの人々は食べる物が無いとか、飲む物が無いという状況ですから、お腹の皮と背中が引っ付いた状態で死んでしまうということです。このことをこの国の人々は

もっと知るべきです。豊かさの貧困だと思います。「過ぎたるは及ばざるがごとし」という言葉がありますけれども、いきすぎていると思います。とんでもない時代になってしまったという感じがいたします。

経済的には豊かなのです。中国に追い抜かれて、世界でアメリカ、中国に続いて3番になつたとかと言っていますけれども、これだけ経済的豊かさを極めたにもかかわらず、自殺者が増えているということについては、明らかに私たちの地域づくりが追いついていないのです。経済力を強めるとか、そういう問題ではないということを表していると思います。

同じように自殺予備軍と言ってもいい精神に病を持っていらっしゃる方も年々増えています。地域づくりで大事なのが高齢者とか、障害者とか、女性です。この三者がキーマンだと私は思います。その中で私は鬱病のことを言ったわけです。私もそういった方々のご支援をボランティアで随分とやっています。あるいはそのお子さんたちを持つお父さん、お母さんの会を育成会といいます。大変失礼なことながら彼ら彼女らの地獄の叫びがよく聞こえます。「どうしたらこの人々のためになるのだろう」と。私の本当の専門は石井知事が知っているように本当は中小企業なのですが。

なぜ私がこのようなことを考えるのかと思うことがあります。しかし、誰一人として傍観者であってはならないと思っています。私たちが自力ではできない、しかし、正しいことをしている人々がいたならば、私たちがやるべきことはその人を支援することです。そういった人は比較的火の粉がかかってきます。あの火の粉というのは、私も経験していますけれども、とても熱いです。あの熱い火の粉を振り払ってあげることが私たちの仕事です。決して傍観者であってはならないと私は私の学生たちに言っています。私の学生といえども、100%社会人です。90%は社長、1割は公認会計士ですから、営業力のある方々です。その方々に業績を高めようなんてことをするなという経営学の極意を私は授けています。

さて、鬱の問題です。10万人、20万人からスタートして、とうとう100万人を超えてしまいました。そのほとんどの方が組織社会の中で、企業組織の中で発生しているのです。お年寄りになって、老後に発生しているのではないのです。15歳から64歳の方がほとんどです。つまり、それは企業との関係なのです。明らかにその人の弱さもあるのかもしれませんが、その人だけにすべての問題があるとは到底思えません。企業にも、組織にも多くの問題を孕んでいると私は思います。この国には精神科医というドクターが大勢おられ

ます。割り算をいたしますと、人口1万人に対して1人いるという数字が出てきます。

世界のアメリカはどうか。イギリスはどうか。ドイツはどうか。あるいは最近幸せと言うと必ず出てくるブータンはどうか。トータルのデータがありますから、データを全部見ってみました。やはりこの国は異常です。国勢調査でブータンは国民の幸せを調査しています。この中でデータを見てみますと、ブータンは人口70万人の国家で、経済的豊かさは日本の戦前水準です。決して豊かではありません。ただ、日本の戦前は見事なことに地域コミュニティが成立していたと思います。助け合いというか、自利ではなくて、利他の心を持つ方々が圧倒的多数だったと思います。

ブータンはあれだけ貧困なのです。ご案内のように海拔3000mに耕地があり、富士山に匹敵するような高さのところで70万人の人が住んでいらっしゃるわけです。富士山に登ったことがあるかどうか。私は数回登りましたが、正直3700mなんて息も絶え絶えです。3000mだって同じだと思います。そこに70万人の方が肩を寄せ合って生きていらっしゃるわけです。そこに精神に病を抱えた方が何人いるのかと逆算をいたしまして、医者の数で調べてみました。

ブータンについて日本で一番詳しい人がおられます。私なんかよりはるかに立派な先生ですから、いつの日かこういう機会にお呼びになるといいと思います。ブータンの情報は彼女からの情報がほとんどです。2冊ブータンに関して本を書いている西水美恵子さんという方です。日本人の誇りだと思います。こんな方が日本人で、私は日本人でよかったと思いました。年は私と同じです。残念ながら、日本に住んでいません。ただ、彼女の最後のポストは世界銀行の副総裁です。日本銀行の総裁だってとてつもないことですけれども、世界銀行の副総裁までのぼり詰めた方です。

そのときに世界から貧困を無くそうと言って365日戦った方で、西水美恵子さんという方です。アメリカのとある大学の教授をやられて、途中から、グラミン銀行を創設したユヌスさんと同じようなパターンでしたけれども、今はフリーの立場でもう一回この国をつくり直すというお仕事に彼女は尽力してくれて、私はミクロから、彼女はマクロから、握手しながらいろいろなことをやっているのです。

機会があればお呼びになるといいと思います。通常はアメリカの方に住んでおられます。ご主人もイギリスの方です。ただ、お母さまが横浜にいらっしゃるようですから、時々来られるのです。一番今日のテーマにいい『国をつくるという仕事』という本を書いていますから、名著だと思います。その中にブータンのことも滔々と書いてあります。

さて、精神科医についてですが、ブータンは70万人に1人しかいないのです。日本は1万人に1人いるのです。世界の状況から見ても、この国はおかしいと思います。一生懸命私たちは地域づくりをやってきましたけれども、人を増やすことが地域づくりではないと思います。人々の所得を増やすことも違うと思います。貧乏だって幸せを感じればいいわけです。すべての政策の物差しを幸せ軸に置くべきだと思います。

企業も同じです。企業ですから、残念ながら好況と不況はつきものです。私が経営者だったら不況にさせません。不況にさせない方法があります。365日、24時間好況だろうが、不況だろうが、お客さまがのどから手が出るほど欲しい感動的な商品か感動的なサービスを連続的かつ波状的に出し続けなければいいわけだからです。「先生、そんなことは絵に描いた餅だよ。」と言う方もおられます。しかし、私がこれまで研究してきた6600社の1割は不況なんかになったことがないのです。

北海道の帯広の柳月さんという会社は54年連続増収増益でした。長野県の伊那食品工業さんは48年連続増収増益でした。東京の府中にありますエーワン精密さんはなんと40年間売上高経常利益率が20%以下に一度もなかったことがありませんでした。多分皆さん方の関係する企業でそんな会社は存在しないと思います。しかし、あるのです。今、言った会社は徒党を組まないのです。行政に陳情もしないのです。「限りある血税は弱者のために使ってください。私たちは私たちがやりますから」と言っているのです。だから、現場を見ないと、数の多さが示す事実として上の方に伝わってこないのです。

今、言った鬱の人が残念ながら増えているのです。もう一つだけにいたします。利他の心と言いました。自利の心ではなくて、利他の心と言いました。私は正しいのは利他、自利だと思います。他人のために、人々のためにと。ですから、幼稚園から、小学校から教育を変えた方が私はいいと思います。地域づくりのためには教育はすごく大事です。大阪の方でも教育改革うんぬんとありますけれども、私が言っている教育改革と全く意味が違います。乱暴に一言だけ、私自身は社会経験を経て大学人になっておりますから、自分ごとのようによく分かります。もし社会経験がなくて、いきなり教員になったならば、今のような言動ではないと思います。純粋培養で教育者になったならば、こういう話は皆さん方にできないと思います。

幸か、不幸か、社会経験を経たのです。つらいことも、上司との関係、部下との関係、横との関係、いろいろなことがありました。ですから、今は学生たちを見ますと、「ああ、この子は独りぼっちだな。この子はうちで何かあるのではないか。いじめがあるのではな

いか」なんてことを、日常的に接触しているから私は簡単に分かります。22歳、23歳で大学を出て、ただ単に受験勉強だけで高等学校の先生になって、生徒は16歳、17歳、18歳で、ご自身は22、23歳です。最近教育界で問題になっているのは、先生の精神病が非常に増えているということです。逆いじめになっている例もたくさんあるわけです。

校長先生も平気で「いじめがあったなんて知りませんでした。元気でしたよ」なんて耐えられないようなご発言をテレビの前で滔々とやっているという状況がよく見られますけれども、違うと思います。ある県の教育委員会の教育審議会で「小学校であれ、大学であれ、学校の先生は最低10年以上社会経験を踏んで、喜びも、悲しみも、苦しみも自分ごとのように体験して、それでも32歳で決して遅くはない。その方が先生のためにも、家族のためにも、子どものためにも、地域社会のためにもいい。この地球は永遠に続くわけですから、今日のことではなくて、明日のために」と随分口を酸っぱくしてお話ししましたが、残念ながら、そんなことに耳を傾ける人がおりませんでした。

最後に一つだけ、私の友人で世界の人々に対して毎年アンケート調査をしている人がいます。その方の作ったデータはたくさんありますが、一つだけにします。これからの地域づくりで大事なことです。一つだけです。「あなたは助けを求めている人、困っている人、弱き人々が自動車やバスに乗って来た場合、席を譲りますか」ということに対して、世界の国々でサンプリングして調査を続けている先生がいるのです。最新のデータでは、残念ながら、席を譲るという人の割合は世界的に低下傾向にあります。例えば紳士の国といわれたイギリスが60%でした。10人中6人ということです。こんなにも成り下がってしまったかと私は思いました。アメリカは50%でした。それはどうでもいいのです。私たちが住んでいるこの国はどうか。この国のデータを見て愕然といたしました。いつも最低なのです。今回は18%でした。データが間違っていると思いません。私は日常的に新幹線にも、在来線にも乗ります。正直、口のここまで出てきますけれども、言ったら終わりだと思ってただ耐えています。毎日苦しくて、その様を見たくないから乗りたくはありませんけれども、瞬間移動なんてできるわけではありませんから、乗らざるを得ないので、乗っておりますけれども、正直苦しいです。

何が苦しいか。自分はお年寄りがいれば、あるいは私の仲間もお年寄りがいれば瞬時に席を立つことにしております。そのために用意された席に、どう見ても弱者と思えない方々がメールをしたり、寝たふりをしたり、新聞を読んでいるのです。その方々が若者だけではなくて、私たちの仲間もいるのです。中年も、高齢者といっても、まだ60代の方もいら

っしやるのです。悲しくなりますけれども、すべてはそこから始まっているのではないかと
思います。

先日海外に行って、静岡の駅まで新幹線で来まして、静岡の駅から、私は藤枝という駅
なものですから、五つくらい駅があります。そこまでのときのつい先日の話なのです。乗
り換え時間が結構ありましたから、私は在来線の一番前に立っておりました。ドアが開き
ました。真ん中の席に座ることができました。時差ぼけもあったから正直ほっといたしま
した。周りを見たらだんだんと混んできまして、とうとういっぱいになりました。立って
いる人も出てきました。あと数分で列車が出るというときに杖をついたおばあさんが乗っ
てきたようです。

私は最初は気が付きませんでしたけれども、周りにお年寄りがいるか、いないか必ず私
は確認して乗っています。その方が入り口のところにいたのです。杖を持ちながら、それ
でも倒れそうだと思ってバーにしがみつくように立って、明らかに遠くからですけれども、
その持っている姿は手が震えていました。そのすぐ隣にはシルバーシートがあるのです。
その逆の所でも屈強な若者が座っているのです。大声を出すわけにもいかず、私は当然そ
れを見て、見ぬふりはできません。私の仲間、学生もみんな全員私と同じように行動しま
す。一度機会があつたら確認していただきたいと思います。

隣に座っている女性の方に「あのおばあさんをここに座っていただくように連れてきま
すから、席を確保してください」と依頼して、真ん中に座っていましたから、そのけそ
このけという形で歩いていきました。そして、そのおばあさんに「あそこに席があります
よ」と私は声を掛けてあげました。そのときのほっとした表情のおばあさんの顔を私は今
でも忘れることができません。私の隣に座っていた女性の方は何も言いませんでしたけれ
ども、その次の駅で彼女は降りました。そして、私に座ってくれと言うのです。私は彼女
はうそを言ったと思います。恐らく私のためにあえていつもの駅より一駅か二駅前に降り
たのではないかと私は想像いたしました。

ともかくですけれども、そんなことの繰り返しなのです。地域づくりというけれども、
それが一般的には政策の陰に隠れているのです。一番大事なところだと私は思います。そ
れで、実は先般幸せということを出したわけです。本邦初ですから、非常に乱暴なデータ
だと思います。しかし、それぞれに投げたわけですから、各地域社会であれをたたき台に
しながらよりバージョンアップすればいいと私は思います。決してランキングを付けるの
が目的ではなくて、ランキングの評点を通じた地域づくりのどこに問題があるのか。どこ

が劣っているのか。どこが優位なのか。それを発見してもらいたかったというだけです。今まであまり使わないようなデータを使ったのです。基本的には幸せ軸を示すのではなく、ろうかというものを使ったわけです。これが前回のデータだったわけです。地域づくりというのは私は住民の幸せづくりだと思います。その中で一番大事なのは、私の専門でもありませんけれども、産業、企業です。これが一番大事だと思います。

人間はどうしたら幸せとを感じるか。一つ例をお話いたします。今日お帰りになるのでしようけれども、もしお時間があるようでしたら、今から言う何か所かに寄っていただきたいと思います。一つは渋谷です。会社の名前はダイアログ・イン・ザ・ダーク・ジャパンといいます。済みませんが、知っていましたら手を挙げてください。名前だけでも結構です。ダイアログ・イン・ザ・ダーク・ジャパンといいます。日本語に直しますと、「暗闇の中の対話、日本」となると思います。従業員が20人くらい働いていらっしゃる会社です。今から3年前に創業された会社です。渋谷のあるビルの地下にあります。今日行かれなかったならば、「ダイアログ・イン・ザ・ダーク・ジャパン」と検索すればすぐ出てきますから、それを見ていただきたいと思います。

こういう会社こそ地域社会の宝だと思います。だから、私たちは一生懸命応援しています。この会社をつぶしてはいけないと思います。この世の中には「つぶれた方がいいんじゃないですか」というほど、劣悪な会社が掃いて捨てるほどありますけれども、この会社はどんなことがあっても守らねばいけない、つぶしてはいけない会社だと思います。そういう会社が今からの地域づくりの主役です。

名前で分かったと思いますけれども、20人の方はほぼ全員が視覚障害者です。つまり、目の見えない人です。そのほとんどは生まれつきなのです。目が見えない子どもを生みたいというお母さんはいないはずですが、目が見えないままで生まれてきたいなんていう赤ちゃんもいないはずですが、何らかのトラブルで目が見えなくなった方がいいなんていう人はこの世に存在しないわけです。私自身も、家族も全く無縁の世界です。だからこそ余計に私は言うようにしております。

この国の障害者の方は約七百数十万人です。人口比で約6%です。その多くはお年寄りです。ということは、加齢すると自然、必然的に障害を持つということです。私の母親もそうです。もう一つのタイプは小さな赤ちゃんの状況、あるいは生まれる瞬間、あるいはお腹の中の段階でという方も少なからずいらっしゃるわけです。その方が人口比6%なのです。

障害者を雇用しなさいという法律が先進国にはすべてあります。この国にもあります。ご案内のように、その比率は民間企業で 1.8%です。そのことを法定雇用率といいます。この比率が、とうとう来年 4 月から 2.0%になります。ともかく私は 1.8%が 2.0%になってもはっきり評価しません。私はなる可能性もないし、なりたくもないし、もし厚生労働省に入ったら、段階的に私は 6%に持っていきこうと思います。それが自然の摂理だからです。それが正しいことだからです。

しかし、現実には法律が 1.8%なのです。その法律を守っている会社はわずか 45%しかないのです。平均は 1.68%になっているのです。だから、特別支援学校、養護学校を卒業しても民間企業に就職できないのです。多くの人は作業所、授産所で働くのです。そこでも定員がいっぱいの場合にはグループホームで朝から晩までテレビを見て、ごろごろしながら暮らさざるを得ないのです。そこでもお金のない方々は自宅のまるで隅っこのような部屋で暮らすような状況になるのです。誰だって幸せになりたいわけです。そんなことをして幸せなんか実感できないのです。

ダイアログ・イン・ザ・ダーク・ジャパンの話です。先ほど従業員が 20 人と言いました。そして、この会社は、全くこの世界に縁もゆかりもない方が作ってくれたのです。彼の本職とは違うから規模を拡大しようなんてつもりは毛頭ないのです。各県が似たようなものを作ればいいわけです。規模を拡大しようなんて全然思っていない。有名になりたいとか、規模を拡大したいとか、儲かりたいなんていう気持ちは毛頭ないわけです。本業が全く違う世界にあるわけです。その彼にやっていただいて申し訳ないと私は思いました。だから、私は支援しているのです。理由は簡単なのです。

3 年前に初めて行ったときに暗闇を案内してもらいました。90 分かかりました。そこで一人の女性の方と話すことができました。視覚障害者です。30 歳くらいの女性の方でした。その方と 30 分くらい対話をしたときに彼女はこう言ったのです。「私のこれまでの人生は健常者の方にお礼を言い続ける人生でした。お礼を言い続ける人生の中で幸せなんて感じたことは一度もありませんでした。生まれてよかった、生きていてよかったなんて一度も思いませんでした。それどころか毎日毎日死にたいという日でした。しかし、この会社に就職して、私の人生は変わりました。毎日幸せなのです。毎日健常者の方、あるいは障害者の方からお礼を言われるのです。お礼を言われるということがこんなにも心揺さぶられて、心和んで、背中が震えて、生きていてよかった、お役に立ててよかった、生まれてよかった。私の長い長い人生の中ではそんなことはありませんでした」。そして、最後にこう

言ったのです。「だから、先生、どうか、この会社がつぶれないように、これからも持続されるように応援してください」と頼まれたのです。「応援しますとも、命のある限り」と私ははっきりと答えてきましたけれども、そのことを実践しているだけです。

先日、四国経済産業局の職員の研修に立ち会ったときに局長さんがのろしを上げてくれて、職員の研修の一環としてここに連れて来るといので、第1回が行われました。恐らく間違いなく心優しくなると思います。心優しい人をつくる、利他の心を持った人をつくるということで、産業界も教育界も地域社会も地域コミュニティも、これが地域づくりの一番大事なところではないかと思います。せっかくあちこちから東京に來られて、ダイアログ・イン・ザ・ダーク・ジャパンの話をいたしました。社長さんは金井さんという人ですから、私の名前を言えばすぐ分かると思います。

また、先週土曜日、藍工房という会社に行きました。三軒茶屋です。機会があったら行ってください。藍工房といいます。藍染めをしている会社です。もし藍染めに興味がなかったら、おいしいフランス料理を食べたいというのだったら、同じ三軒茶屋の近くにアンシェーヌ藍という会社があります。藍工房の藍は草木染の草かんむりの藍なのです。工の房と書いて、藍工房といいます。その関連会社で、フランス料理店というのがアンシェーヌ藍というのです。藍をキーワードに使っていますから、同じ会社なのです。

先週の土曜日はここに行ったのです。なぜ行ったのか。これも人を幸せにする会社なのです。ちょっとお話しいたしますと、藍工房というのは藍染めをしている会社と言いました。フランス料理店というのはフランス料理を食べさせてくれるレストランです。それを作った方は竹ノ内睦子さんという方なのです。御年72歳になる女性です。この方は別に障害者と縁もゆかりもあるわけではないのです。たまたま県が主催した勉強会に行ったときにそういう話をしてくれる先生がいて、隣に同席した見知らぬ女性と「何とか私たちもお役に立たないか」と言って、二人で立ち上がって、この会社を作ったのです。それが藍工房なのです。

なぜ藍工房を作ったかという、知り合った障害者の方が「生涯に一度でもいい、藍染めをしたい」と言った、それだけだったそうです。だったら、藍染めをしている工場に頼めばいいではないか。そんなことは誰だって分かっております。当然頼みました。しかし、彼女を雇ってくれる、採用してくれる藍染め工場が残念ながらなかったのです。この彼女の夢を実現してあげるために、この二人の女性はあえて藍工房を作ったのです。なぜ民間がそんなくだらないことをやるのだと役所から随分たたかれたそうです。ぶったたき運動

を受けたようです。

では、アンシェーヌ藍は何のために作られたのですかとききました。「先生、同じです」。知り合った女の子が「すてきなフランス料理店で働きたい。掃除だけでもいい、水出しサービスでもいい、トイレの掃除でもいい、皿洗いだけでもいい」となるような声で手を挙げた状態で頼んだそうです。これも同じように知り合いのフランス料理店に依頼の連絡をしたのですけれども、残念ながら、快く障害者を迎えてくれる施設がなかったのです。ならばと言って、彼女はアンシェーヌ藍を立ち上げたのです。それに呼応して、東京會館のシェフが来てくれたのです。

しかし、商売はあまりうまくいっていないのです。経営が下手なのです。残念ながら、私はこの会社と知り合ったのがつい最近なのです。アンテナが低すぎたと思いました。なぜこの会社を独りぼっちにさせておいて、こんなに苦しめてしまったのだろうと思って、正直反省しています。だったら、これから時間がある限りこの会社を応援しようと思ったのです。それが藍工房、アンシェーヌ藍なのです。

土曜日は大学院が一番忙しいのです。朝から夜まで講義があるのです。午後の講義はゼミなのです。大学院ではプログラム演習とっていますけれども、約 3 時間です。約 40 人が私の研究室に所属しています。その彼らに帰ってきて、この話をいたしました。そうしたら、ゼミ長を中心に全員が「ここに行こう。ここで学習をしよう。勉強しよう」となりまして、実は先週は藍工房を見て、その後、藍工房からアンシェーヌ藍まで二駅あるのですが、その二駅を歩きました。なぜ歩いたか。お金がなかったのではないのです。竹ノ内さんご自身の足が癌にかかっています、車いすの生活なのです。彼女が「私は電動車いすで行く」と言ったからです。私たちがその話を聞いて汽車に乗ったら終わりではないですか。ただ彼女に合わせただけなのです。しかし、それは私が言ったのではないのです。私の仲間、学生が言ったのです。

現実を見せれば、事実を滔々とお話しすれば、私は若者は新人類ではないと思います。よく「今の若者は駄目だ」とか言いますが、とんでもない、駄目なのはわれわれだと思います。変わるべきは若者ではない、変わるべきはリーダーだと私は思います。彼らは恐ろしいほど私たちの背中と心を見ているのです。ただ、言わないだけなのです。言わないはずです。言ったら終わりだからです。人事権を持っている人に盾突くおばさんはそうはいないと私は思います。私は盾突いてずっと来ましたが、それは苦しいからです。

これからの地域づくりというので、私は藍工房を言いましたけれども、また、もしも機

会があったら、もう一つ多摩の八王子の方の多摩草むらの会というところに行ってください。ここも同じように障害者が働いている場所なのです。ここはなんと 400 人が働いているのです。恐らく日本一だと思います。風間さんという一人の女性の自分自身の次男坊がお気の毒に飛び降りたようです。自殺したのです。立派な大学を出て社会に出ただけれども、その中で精神に病を来してきて、結果的にその次男坊は飛び降り自殺したそうです。「自分の息子のような人間を二度と作ってはいけない」と言って、彼女が立ち上げた会社が多摩草むらの会という会社なのです。壮絶だったと思います。

一番参考になる会社は、私が『日本でいちばん大切にしたい会社』に書いた日本理化学工業という会社が川崎にあります。チョークを作っている会社です。私が一番最初に本に書きました。従業員が 50 人で、そのうちの 36 人が障害者で、そのほとんどが重度障害者です。しかも障害者雇用の必要性に気づいて、今から 55 年前からやっていたらっしゃるのです。法律があったからやったのではないのです。法律ができる前からやっていたらっしゃるのです。

これからの地域づくりというのは幸せづくりだと思います。特に今日は行政の方、あるいは議員の先生方がいらっしゃいますから、私はそのキーマンは男だとか、強者だとかではないと思います。社会的に言えば、弱い立場にある人だと思います。その一人は高齢者だと思います。いかに高齢者が幸せを実感できるような社会づくりをすべきだと思います。もう一人はいかに障害をお持ちのお父さんやお母さんやご兄弟が幸せを実感できるような社会づくりです。あるいはもう一つはシングルマザーだけではありませんけれども、女性です。この三者の方々が幸せを実感できるような地域づくり、地域社会だと思います。それを私は産業面から言ったのですけれども、コミュニティの問題とか、いろいろあると思います。あるいは教育面からいっばいあると私は思います。

お手元に資料があっても一つも使わなかったのですけれども、多分新聞等で見ていらっしやるでしょうと思います。最後になりますけれども、先ほど石井知事にちょっとお見せしたのです。来月ごろになりますけれども、「47 都道府県の高齢者の働く環境に関する研究」というレポートが出ます。高齢者は大事です。高齢者に優しくすると、若い人も燃えると思います。高齢者に優しくすればするほど、なぜ高齢者に優しくするのだなんて言う若者は偽物の若者ですから心配する必要はないと思います。なぜなら、すべての若者はやがて高齢者になる宿命の中で生きているわけです。

高齢者が時代を決めますから、高齢者の働く環境が一番どこがそろっているかという 25

のデータを抽出計算式で出しまして、相互計算をしたというデータがここにあります。まだ最後の計算ができていませんけれども、1番、2番と言いませんが、非常に上位に来たのは佐賀県、富山県、長野県、滋賀県、岡山県、鳥取県、島根県、熊本県です。この辺が上位に来ておりました。下位に来ておりましたのは大阪府、青森県、沖縄県、群馬県、三重県、北海道、兵庫県、秋田県、埼玉県です。この辺が低く出ておりました。私が好きとか、嫌いではないのです。文句があるならば25のデータに言ってくださいという感じですがけれども、そういうような状況でした。また、働く高齢者がどういう条件が整備されれば幸せとを感じるかというデータを作りましたから、いいかげんなデータではありません。もしご質問があればお答えするようにいたします。

残念ですがけれども、約束した時間を3分くらいもう既にオーバーしてしまいました。これからの地域づくりというので、これからのところはまだ不十分であることは百も承知しておりますけれども、余韻を残して帰った方がいいのではないかという感じもいたしますから、今日はこのくらいにいたします。どうもご清聴ありがとうございました。